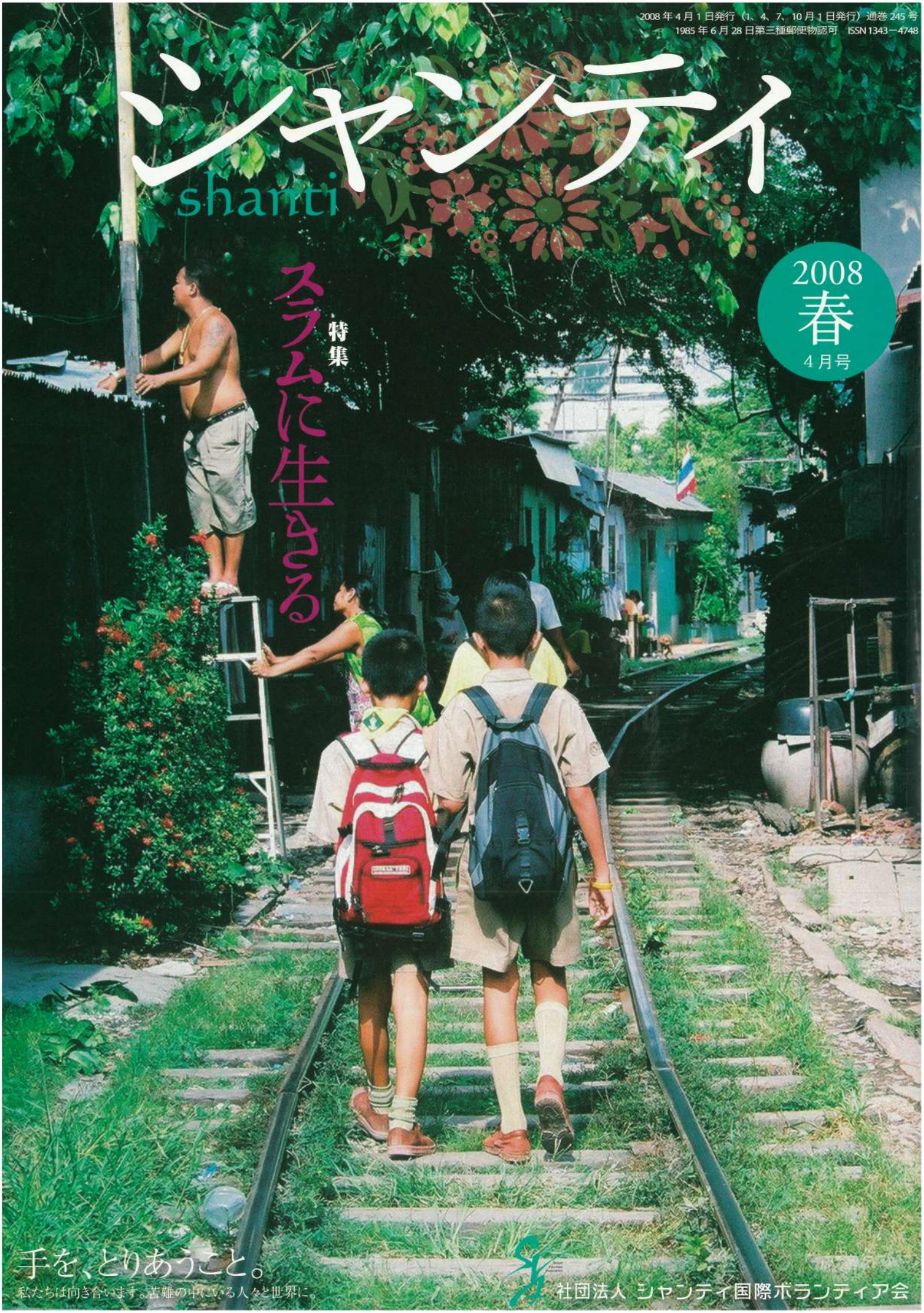
2008年4月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻245号
1985年6月28日第三種郵便物認可　ISSN 1343－4748

シャンティ
shanti

2008
春
4月号

特集
スラムに生きる



手を、とりあうこと。
私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。

社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ〈高齢者活動〉

The Elderly's Activities in Myanmar (Burma) Refugee Camp

❶高齢者が語る民話や実際の体験談を聞くのは子どもたちも大好きです。
❷民族衣装の長い布をまとって、杖を突いてゆっくり歩く男性。難民キャンプでの生活が20年におよぶ人もいます。
❸お茶の時間。みなさん甘いお菓子が大好きです。
❹ヨガやゲームで気持ちよく体をうごかします。

【写真：❶❷川畑嘉文】

3カ月に一度、難民キャンプの図書館にはいつもと違う顔ぶれが集まります。60歳以上の高齢者が、お茶を飲みながら日常の悲喜こもごもを口にし、カレンに伝わる民話や詩を語り、ゲームやヨガをします。ふだんは家の中にいることが多い高齢者も、生き生きと楽しんでいます。人気があるのはヨガで、「ふだん使ってない筋肉がほぐれるよ」とにぎやかな声が聞こえてきます。

第三国定住について聞くと、「若い者は一緒に外国へ行こうっていうけれど、ほんとは行きたくないんだ……」。多くは語りませんが、胸のうちは複雑です。

SVAでは、高齢者のみなさんが語ってくれた民話を集め、そのうち5つを絵本として出版しました。『孤児と賢い妻』『トゥ・トゥと太陽の葛藤』『4人の兄弟』『孤児と魔法使い』『一人の貧しい孤児』。カレンの民話には、孤児の成功物語が多くあるようです。

高齢者活動の課題は資金の獲得ですが、今後はもっと回数を増やし、子どもたちとの交流も取り入れていきたいと考えています。

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所長　小野豪大

表紙：タイ・クロントイスラム。港に続く線路を歩いて学校に通う小学生。［撮影：瀬戸正夫］

SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって
苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、
その人々と共に解決のための活動を行います。
特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、
「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

巻頭言

道（みち）

洞爺湖サミット開催に向けて

専務理事　秦辰也

今年7月、北海道の洞爺湖で、G8サミットが開かれる。日本での開催は8年ぶりで、前回は森首相の時に沖縄で開かれた。NGOの働きかけもあり、途上国の債務削減や保健分野への協力などの成果に結びついた。

洞爺湖サミットに際しては、昨年1月、G8サミットNGOフォーラムが設立された。現在参加している国内のNGOは120を超え、SVAも加わっている。NGOが提言する主要課題は、環境、貧困・開発、人権・平和であり、これまで私はSVAを代表して貧困・開発問題に取り組むNGOユニットのリーダー役を務めてきた。

福田首相は、2月のダボス会議でG8サミットの主要議題は気候変動、開発・アフリカ、世界経済、テロ・核不拡散であると表明した。果たして真の成果をどの程度あげられるのか、世界が注目している。一見、私たちには雲の上の存在にすらみえる8カ国首脳の発言や政策にも、日本のNGOが世界のNGOや市民社会とつながり、力を結集することで、直接影響を与えることができる。NGOに限らず市民一人ひとりが、この機会にしっかりと途上国の最も厳しい状況にある人々の声を優先し、世界の首脳たちに届ける責任があるのではないかと思う。わずかでも政策が変われば、それが途上国の貧困削減のみならず、私たち自身の生活にも大きな変化をもたらす結果になってくるだろう。

こうした動きにSVAが関わる意義は大きく3つある。第一に、途上国の貧困削減について、これまでの活動経験を生かしてしっかりと各国政府首脳に伝えられることである。SVAが中心課題とする教育協力は、保健医療や水問題と並んで最も重要な課題のひとつだ。第二に、今回のように相当数の国内NGOがフォーラムとして連携し、世界の市民社会の協力を得て行動することは過去になかったことであり、これからの社会を形成する市民力の試金石になると考えられる。そして第三は、近年内向きである国内の国際協力への取り組みを再度活性化させ、市民自らが地域社会や海外とのつながりを見出し、平和な地球社会（グローバル・コミュニティ）の構築に努力していくことである。

SVAも、G8サミット関連の会議や市民の集いの場を活用し、今一度自らの存在意義と、これからの国内外での方向性を再確認する機会にしていきたい。貧困や紛争、環境問題からの脱却という平和への願いを、「七夕サミット」の短冊に刻んでいければと思う。

わたしが好きな絵本

my favorite book

私の名前はバクミナです。8歳です。私にとって図書館は学校の代わりです。何年か前にお父さんが病気になり、私は家の手伝いをするため学校に行けなくなりました。お父さんが死んでからしばらくして学校に行ったら、先生に「名簿に名前がないから来てはいけない」と言われました。

図書館では、お話を習ったり、詩を詠（うた）ったりするのが好きです。字をもっと書けるようになりたいです。絵本で一番好きなのは**『ライラとグルラング』**。この絵本の中で兄妹がケンカをしますが、後でちゃんと仲直りをします。ケンカは良くないと思います。図書館に来て新しい友だちができました。学校に行っていない子もいます。私だけじゃないんだと思いました。

今はおじさんの家に住んでいます。掃除や洗濯のお手伝いがあるので、図書館に毎日来ることはできません。お母さんが「ありがとう」って言ってくれるのがうれしいです。

（インタビュー：アフガニスタン担当　山本英里）

特集

スラムに生きる

大火災に見舞われたタイのスアンプルースラムの復興と、カンボジアのゴミ捨て場に生きる少女を通して、スラムに生きる人々の姿をお伝えします。

THAILAND

タイ

大火災を乗り越えて

① 住民も協力して消火活動が行われたが、
わずか3時間あまりで地区全体が焼失した。
② 家から家財を運び出す住民たち。
③ 予想外の火事の大きさに混乱が広がった。
④ なすすべもなく見守る消防車と人びと。
⑤ すべてを失い、生活を再建するのは
容易ではない。
⑥ 学校の教室やテントでの避難生活が続く。
⑦ 食事の配給を受け取る。

[写真‥4頁特集扉・5頁①②・6頁⑦
7頁①②④・8頁②〜⑥は、瀬戸正夫撮影]

2004年4月23日昼。タイが1年で最も暑い季節に、バンコク中心部にあるスアンプルースラムで火災が発生しました。スラムでの小さな火災は珍しいことではありません。住民は「いつものことだ。きっとすぐに消えるだろう」と思いながら、地区の外に避難しました。しかし、この時ばかりは違いました。火の手は3万平方メートルにおよぶ地区全体を焼き尽くし、かつてあった狭い路地、小さな家々、家財道具のすべてが焼失しました。

死者は出なかったものの、焼け出された8000人の住民は、この日から苦しい生活を強いられることになりました。もともと生活に余裕のないスラムの人々。多くが建設工事の日雇いや天秤棒をかついでの物売り、屋台、バイクタクシーの運転手など、不安定で低収入の仕事に就いています。住む場所を失くしてからは、避難所となった学校の教室、公園のテント、アパートなどを転々としながら、スアンプルー地区の復興を待ち望んできました。

2006年夏、遅れていた再開発がようやく進展し、焼け跡や沼地は整備され、道路が敷かれ、集合住宅が建ち始めました。そして1年後には、工事がほぼ終了し、かつての住民たちも戻りつつあります。地域の復興はどのように進んでいるのでしょうか。

タイの物価はどのくらい？

●タイの通貨単位はバーツ（B）。1Bは約3円（2008年3月現在）

●公務員の大卒初任給は8000バーツ（約2万4000円）。屋台で食事すると1食30バーツ（約90円）。5人家族でレストランに行くと1回およそ500バーツ（約1500円）。

●スラムの住民の収入は職業にもよりますが、だいたい6000バーツ（約1万8000円）です。

品物	単位	値段（日本円）
米	1kg	20B（約60円）
鶏肉	1kg	80B（約240円）
キュウリ	1kg	10B（約30円）
卵	10個	30B（約90円）
バナナ	1房	15B（約45円）
オレンジ	1kg	10B（約30円）
ガソリン	1ℓ	49B（約147円）
ノート	1冊	10B（約30円）
ボールペン	1本	5B（約15円）

避難生活

①建設中の集合住宅（2006年8月）。
②仮設の図書館で復興について話しあう住民。
③タイ舞踊を練習する子どもたち。
④道路の脇に小屋を作って、集合住宅の入居を待つ人々。

火災前のスアンプルー

①火災以前にスアンプルーにあった図書館の入り口。　②図書館スタッフによる絵本の読み聞かせ。
③保育園の中庭でスラムの緑化活動（左は国連環境計画親善大使としてタイを訪れた歌手の加藤登紀子さん）。
④住民が協力して地区の清掃活動を行っていた。　⑤図書館で開かれていた住民会議（1989年頃の様子）。
⑥市場で果物を売る女性。　⑦屋台で料理を作る。

それぞれの4年間

――火災から、復興まで

ノンティチャー・シーサヌー
29歳

火災があった時、生まれたばかりの息子を抱え、目が見えない母の手を引いて必死で逃げました。家財道具は何ひとつ持ち出せませんでした。2007年7月に、スアンプルーの集合住宅が完成し、戻ってきました。完成していたのは建物だけで、内装などはすべて自分たちで行いました。父は日雇い、夫はバイクメッセンジャーの仕事をしています。収入は不安定ですが、これから20年はローンの返済をしていかなくてはなりません。8月にSVAの保育園が開設されたので、4歳の子どもを預けて私も働きにでました。子どもは保育園に入って、絵本が読めるようになり、あいさつもできるようになりました。生活は大変ですが、2カ月前に2人目の子どもが生まれ、これからもっとがんばっていかなければなりません。

アノー・カハウォン
52歳

夫と孫（3歳）の3人暮らしです。現在はスアンプルーの知人の家に借間しながら、集合住宅への入居を待っています。夫はすぐ近くの空軍の施設で働いていますが、火災の後、郊外に引っ越した時は、通勤に2時間以上もかかりました。スアンプルーに戻れるよう役所に交渉に行っても、「3カ月後に来てください」と何度言われたことか。みんなバラックや仮の住まいを転々としています。

孫は去年の8月から保育園に通っています。図書館も好きで、園の行き帰りに絵本を読んであげています。保育園の先生方はよく面倒を見てくれます。でも朝は新しく入った子どもが泣くので大変です。先生が足りないときは私も保育室で泣いている子どもをあやしたり、園長の相談に乗ったり、また園児募集のビラを配ったりもします。保育園や図書館を利用するだけではなく、自分もできることは手伝うようにしています。この地区の子どものために、住民が協力するのは当たり前のことですから。

ブンシィ（中央。左は妻、右は息子）
55歳

仕事は縫製の請負いです。火災前はSVAの図書館の向かいに住んでいたので、よく留守番を頼まれたものです。火災の後、見舞金の1万バーツが手に入るとすぐに商売道具のミシンとアイロンを買いました。学校の教室やアパート暮らしを経て、2007年7月に集合住宅に入居しました。クジで広い家が当たったのですが、店を構えるため入り口をシャッターに変えたり、床にタイルを張ったり、内装にお金がかかりました。入居して半年経ち、ひとまず落ち着いたのですが、これから借金をどう返していくかを考えると不安です。

息子のティは高校生で、SVAの奨学金をもらっています。彼は地域の青少年グループの中心的な存在で、近隣で行われる社会活動によく参加しています。交通費もかかりますし、夜遅くなることも多いのですが、自らこうした活動に参加している息子を尊重したいと思います。経済的に苦しくても大学には行かせたいと思っています。

ピアンルタイ・トーデー
18歳・SVA図書館の有給ボランティア

スアンプルーの図書館には小さい頃から毎日通っていました。火災の翌日、祖父母と住んでいた家があった場所に行くと、柱も何もなくて床のタイルだけが燃え残っていて、悲しくてずっと泣いていました。自宅の跡にバラックを建て2年ほど住み、その後は借家などを転々としました。その間もSVAの仮設テントの図書館に通い続け、小学校4年生から続けているタイ舞踊の練習にも励みました。高校を卒業し、2007年8月に建った新しいSVA図書館の有給ボランティアになりました。

図書館は子どもたちにとって自分の存在を確認できるところだと思います。家にいてもすることがないけれど、図書館に来れば、本があり、友だちがいて、話しかけてくれるスタッフがいる。自分が参加できる活動があって楽しいし、それを親や周りの大人が誉めてくれます。私がずっとタイ舞踊を続けてきたのは、親が初めて私の踊りを見たとき誉めてくれたのがうれしかったから。それまで親に誉められたことなんて、ほとんどなかったんです。もし図書館がなかったら、麻薬や非行に走る子どもはもっと多いでしょう。

自分を育て、教育の機会を与えてくれた

スアンプルー再生

①完成した新しい集合住宅の前で遊ぶ子どもたち。　②2008年2月24日開館式を行ったコミュニティ・センター。右が保育園、左が図書館。
③セレモニーでタイ舞踊を踊るスアンプルーの子どもたち。　④開館式のリボンカット。左からＳＶＡ若林恭英会長、中山身語正宗八坂隆憲管長、法灌寺齋藤法明住職、タイ社会開発省スター・チャンセーン大臣、在タイ日本大使館公使山田淳氏、シーカー・アジア財団プラティープ理事長。
⑤スアンプルーの住民と喜びを分かちあう。　⑥新しい保育園で生活する園児たち。

図書館の一員として、今度は自分が地域のために働けることを誇りに思います。新しくなったこの図書館がコミュニティ・センターとして、子どもと子ども、子どもと親、人と人をつなぐふれあいの場所になってほしいと思います。

ラウィー・スックジャンター
41歳

火災直後から2007年末まで、住民リーダーとして地域の再建に取り組んできました。集合住宅への入居が始まったのはうれしいのですが、入居にかかった費用、今後のローン返済で「これからこそが大変だ」と考えている住民が多いです。スラムの多くの家庭の平均収入は月に6000バーツ（約1万8000円）ぐらいですが、それぞれ30万バーツ（約90万円）以上の負債を抱えています。私自身も、毎月のローン返済額が1500バーツ、縫製の仕事の収入は7000バーツほどなので、やはり生活は厳しいです。

一方、自分勝手な住民や、麻薬の売買・使用も増えています。みんなが被災して大変なときも協力して助け合い、貧しくても我慢してきました。でも今は集会をやっても人が集まらず、火災当初は団結していたのに、どうしてこんな風になってしまったのか…。表向きには住宅や道路が整備されましたが、地域の人々の意識は変わってしまいました。貧しくても助け合って地域がまとまっていた火災の前のスアンプルーを再生するために、これからも努力していかなければなりません。

コミュニティ・センターを中心にした地域の復興を

スラムの復興が遅れた原因のひとつは、再建計画をめぐり住民組織が二分され、対立したことにあります。開発の利益を狙う企業や政治団体の思惑も絡み、住民の心にもわだかまりが残りました。

ＳＶＡは火災発生の当初から、子どもたちへの緊急奨学金の支給、土地所有権のないスラム住民の借地契約の支援、国からの緊急支援金の確保、貯蓄組合の組織強化などを応援してきました。今後は、地域の真ん中に開設した図書館と保育園がコミュニティ・センターとしての役割を果たし、双方の住民が対話する機会を設け、住民間の溝を埋めていきたいと考えています。また、これまで行ってきた図書館や奨学金の活動、セミナーも継続します。

ＳＶＡの支援した子どもたちが成長し、地域に貢献しようとする姿を見て、ＳＶＡタイランドのスタッフは大変うれしく感じています。住民と一緒に行ってきたスラムでの活動を今後も続け、地域の一員として支援していきたいと思います。

（インタビュー　ＳＶＡタイランド　江幡むつみ・松尾久美）

CAMBODIA

カンボジア

ゴミの山に生きる少女

カンボジアでは、貧富の格差、都市と地方の格差がますます拡大し、貧しい地方から首都プノンペンのスラムへと流入する人々は毎年2万人に上ります。

2003年の調査によると首都プノンペンのスラムは569カ所、世帯数は6万2249戸でしたが、現在は700カ所を超え、プノンペンの人口140万人のうち3割がスラムに住んでいると言われています。その中でも最も劣悪な生活環境にあるのがゴミ捨て場の周りのスラムです。

ＳＶＡがスラムの移動図書館活動で出会ったひとりの女の子を紹介します。

田舎から都市へ

ソック・ピセイちゃんは明るく元気な11歳の女の子です。プレイベン州の村に生まれましたが、2年前からプノンペンのトゥール・チェイ・スラムに住んでいます。田舎にいるとき両親は病気になったおじさんの治療のために村人や銀行から借金をしましたが、返せなくなったので田畑を売って一家でこのスラムに移って来ました。

トゥール・チェイ・スラムは広大なゴミ捨て場の周りにできたスラムのひとつです。毎日トラックで運ばれるゴミは巨大な山と化し、自然発火した煙に包まれています。土壌は有害物質で汚染され、健康に重大な影響があるといわれながらも、ゴミの中から有価物を拾って生活する人々は2000世帯、1万人にのぼります。

ゴミを拾って生きる

ピセイちゃんも朝6時から夕方5時までゴミ拾いをして得た3000リエル（約80円）をお母さんに渡して家族を支えています。ゴミ拾いのほかにも、家の掃除、洗濯、食器洗い、弟の世話をしています。家族6人のうち、まだ小さな2人の子どもを残して、両親とお兄さんと彼女の4人が毎日ゴミ拾いをして生計を立てています。一家4人でゴミ拾いをしても1日2万リエル（約530円）にしかなりません。

生活にかかるお金

家族が借りて住んでいる4畳半の小屋1カ月の借り賃は2万リエル（約530円）。1日のお米代（2キロ）3600リエル（約96円）、おかず代1日1万リエル（約265円）、電気代（電気を引くと高いので車のバッテリーを使っています）1日200リエル（約5円）、水（水道はないのでポリタンクで水を買っています）1日80リットルで1600リエル（約43円）、調理用薪（たきぎ）1日1000リエル（約26円）などのほか、生活必需品を買うとほとんど手元にお金は残りません。生活環境の悪いゴミ山のスラムですが、田舎での生活は今よりも貧しく大変でした。

両親は、利発な彼女を学校に行かせたいのですが、1冊1500リエル（約40円）のノートや1本600リエル（約16円）のボールペンを買うお金がないのです。

夢は「学校に行くこと」

ピセイちゃんはこれまで一度も学校に行ったことがないので字が読めません。そんな彼女の夢はいつか学校に行くことです。そして大きくなったら会社に勤め、家族を支えてゆきたいと思っています。

ピセイちゃんのように貧困の中で家族を支えるために働き、学校に行くことができない子どもたちはスラムや地方にまだ何10万人もいます。絵本を通してすべての子どもたちに夢と希望を育んでもらいたい。そう願いながら、スラムを回る移動図書館活動を続けています。

（カンボジア事務所　手束耕治）

①ピセイちゃん。　②小さな子どもたちもゴミを拾って働く。
③100万都市プノンペンのあらゆるゴミが捨てられる広大なゴミ捨て場。
④ピセイちゃんの母親。　⑤移動図書館で絵本を読むスラムの子どもたち。

SVA活動報告

activity reports

Thailand | タイ

新しく完成したコミュニティセンター。
右が保育園、左が図書館。（写真：瀬戸正夫）

スラムの大火災から4年 コミュニティ・センターが開館

4年前の火災により焼失した図書館と保育園が同じ場所に併設され、コミュニティ・センターとして新たなスタートを切りました。2月24日に行われた開館式には、多くのマスコミが駆けつけ、住民、日本の支援者の方々、そしてタイ新政権の社会開発省大臣も参列し、総勢300名の盛大な式典となりました。

図書館と保育園が実際にサービスを開始したのは昨年8月。図書館には毎日子どもたちの声が響き、保育園では50名の園児が元気に生活しています。中にはスアンプルー地区以外の子どもたちや、障がいがあるため他の保育園で受入れてもらえなかった遠くの地区の子どももやってきます。開館式の当日、子どもたちは、多くの来客に緊張しながらも歓迎の踊りを披露しました。

コミュニティ・センターは、地域住民の集会やセミナーも開かれます。この4年間、仮の生活を余儀なくされ、地域のつながりも損なわれたスアンプルーの人たち。新たな一歩を踏み出す人々にとって、コミュニティ・センターが新たな財産となるように、今後とも地域に根ざした活動を続けていきます。

コミュニティ・センターの建設・運営にご支援をくださった中山身語正宗様、法瀧寺様（広島）をはじめ、復興支援にご協力いただきました多くの皆さまに、心より厚く御礼申し上げます。

（SVAタイランド　松尾久美）

Cambodia | カンボジア

図書館活動の「主役」の子どもたち

みんなが成長する図書館活動

「モイ、ピー、バイッー！」。元気な掛け声と共に、子どもたちの体が動きます。全身を使って『おおきなかぶ』の世界にはいりこんでいるのです。このような活動の現場を日々見ていると図書館活動がもつ「人を育てる力」を感じます。

育つのは子どもたちだけではありません。先生、母親、SVAスタッフ、関係機関の職員。みんなが図書館活動の中で何かを感じているのです。先生たちは「おはなしをするのが好きです。子どもたちの表情がどんどん明るくなっていくのがわかります」と、活動を楽しんでいます。

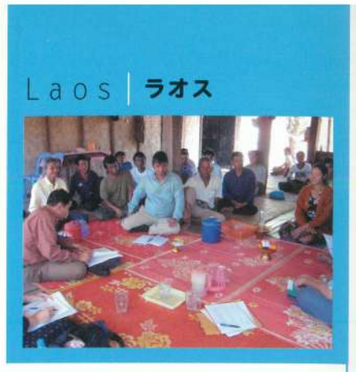
子どもを見守る校長先生からは「図書館活動を始めたら生徒の退学が減り、子どもたちは学校に来るのが楽しく、目上の人を敬うようになった」と感謝されました。

教育省の職員には「学校現場に行くことが少なく、先生たちの努力によってこれほど活動に差が出るなんて知らなかった」と言われました。

州教育局の職員も読み聞かせを自分からするようになりました。同僚は「彼はどこか頼りなくて、いつもみんなの後ろにいる人でした。でも今日彼が司会をしたり、子どもたちに読み聞かせをするのを見て彼が成長したことがわかりました。帰ったら職場で報告します」とうれしそうに話してくれました。図書館活動を支える先生、教育局の職員など関係者の成長が事業の成功につながります。私を含めたSVAのスタッフも一緒に成長していきたいと思います。

（カンボジア事務所　鈴木晶子）

Laos | ラオス



村人への学校建設の説明

村の人々と共に学校建設

建設途中の小学校を訪れた時、学校建設担当スタッフのブンニュアイが梁（はり）に使われている立派な木材を見上げて、「スズキサン。アノキガ、ムラビトノキモチデス」と言いました。

ラオスで行っている学校建設では、学校の机や椅子、梁など重要な部分に使う木を村人に用意してもらっています。木材提供のお願いをすると、その場で「用意しましょう！」と村の人々は答えてくれますが、それほど簡単なことではないのです。

森林伐採の規制が厳しくなっているラオスで山の木を切るには、役所の許可が必要です。村の代表が郡の役所に行き、木材の必要性を説明し伐採の申請をします。さらに郡が県へ手続きをし、許可がおりたら、村人総出で鋸を手に山へ切り出しに行くのです。梁に使う堅くしっかりとした大木を村に運ぶのも大仕事です。

慣れない役所への申請や書類の作成、村人総出の作業も村の学校を建てるため。苦労して用意した木材が学校に使われることは大きな喜びになります。SVAでは、村人の自主性を尊重し、最終的には村人自身による学校の管理・運営ができるよう研修も行っています。

昨年10月、ラオスに赴任して間もない頃に参加した小学校の贈呈式。子どもの数に比べて非常に多くの村人が集まったことに驚きました。その理由が今ようやくわかりました。学校に関わっているのは限られた人ではなく、「村ぐるみ」なのだということを。

（ラオス事務所　鈴木淳子）

Myanmar (Burma) Refugees | ミャンマー（ビルマ）難民

バンドンヤン難民キャンプでの会議の様子
（写真　川畑嘉文）

難民委員会は日本への第三国定住に期待

1月中～下旬、メラマルアン、タムヒン、バンドンヤンの各難民キャンプの図書館事業を視察し、関係者らと活動の現状と課題を話し合いました。今回、各キャンプの自治組織「カレン難民委員会」からある共通の質問をされました。

それは「日本への定住の可能性」です。昨年11月27日の毎日新聞で、日本の関係省庁が難民定住受入の検討をスタートしたと報道されました。同月、タムヒン難民キャンプを訪問したUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）駐日代表の滝澤氏がこの情報を伝え、その後各キャンプの難民委員会にも伝えられたようです。

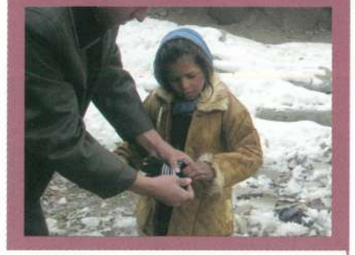
メラマルアンのキャンプリーダー、ボー・ベーさんは「定住受入国（米国、ヨーロッパなど10カ国）に日本が入れば唯一のアジアの国。希望者は多いでしょう」と言います。タムヒンやバンドンヤンの難民委員会でも「日本は気候も似ているし、関心を持っている人はかなりいる」と見ています。

かつて1980年代にインドシナ難民を受入れた経験を持つ日本。UNHCRへの国別資金の拠出はトップクラスですが、国際社会の中で、資金だけはない難民支援の形が求められています。

様々な情報に一喜一憂しながら日々を過ごす難民の人々。こうした彼らの問いかけに、日本社会がどう応えていくかが問われています。

（ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所長　小野豪人）

Afghanistan | アフガニスタン



初めて手袋をはめるという女の子。手は、しもやけで赤黒く腫れていました。

大寒波緊急救援事業を実施

アフガニスタンでは、この冬15年ぶりといわれる大寒波で北西部を中心に全国的な大雪に見舞われました。ほとんどの地域は道路が閉ざされ詳しい情報がありませんが、寒さや家屋の倒壊による死者は750人、負傷者は数千人にのぼるといわれています。

SVAは、1月、首都カブールと東部のクナール州の避難民キャンプを対象に約500世帯に寝袋、防寒着、食料などの物資を配布しました。これらのキャンプでは、国内の戦況が悪化したため家財も持たずに逃げてきた人々が、氷点下20～40℃の寒さの中をテントで暮らしています。お金もなく、暖をとるすべはありません。

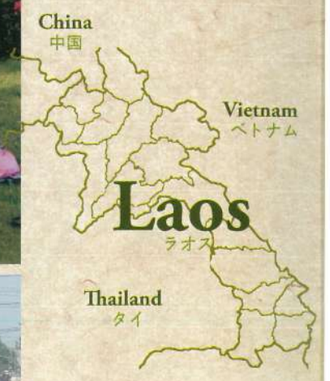
物資配布の当日、カブールでは雪が降りました。集まった子どもたちは裸足の子も多く、薄着で震えていました。スタッフが子どもたちに声をかけながら、上着を着せ、手袋をはめてあげると、「あったかい」と笑顔がこぼれました。1人でも多くの子どもがこの厳しい冬を乗り越えてほしいと、スタッフは氷点下の寒さを忘れて防寒着や食料を配りました。

この事業は調査、計画、実施にいたるまで現地スタッフが行いました。当初は混乱も予想されましたが、地元の住民やキャンプの代表、警察の協力を得て、無事に終了しました。現地の事情を知っているからこそ地域住民にはたらきかけ、率先して事業に取り組もうとする現地スタッフの姿勢をこれからも大切にしていきたいと思います。

（アフガニスタン担当　山本英里）

スタッフ日記 Staff Diary

ラオス事務所 高橋久夫の1日



昨年12月、ニューヨークタイムス紙の『2008年、行ってみたい国53』の第1位にラオスが選ばれました。世界遺産の古都ルアンパバーンとクメール遺跡「ワットプー」や、北部シェンクワンの石器遺跡群「ジャール平原」も注目のまとです。

でももっと魅力的なのは人々の日常です。この国に来た外国人の誰もが「優しい国」と感じるラオス。人と人との距離がとても近く、交差点の信号待ちや食堂、商店で見知らぬ人同士がおしゃべりを楽しんでいる様子をよく目にします。私も見知らぬラオス人に話しかけられます。

単身赴任をしてちょうど丸2年。ラオス語はできないので、スタッフとは英語で会話をしています。地方に出張すると数10年前の日本によく似た景色に出会い、郷愁を覚えます。

托鉢

6:15 起床

ラオスに来てから早起きになりました。早朝の涼しい爽やかな空気と鳥の声は1日の活力の源です。

7時前、近くのお寺からお坊さんが托鉢に出てきます。お坊さんたちの日々の糧は近所の住民が支えています。みんな日曜日も雨の日も休むことなく、早朝に起きてもち米を蒸し、おかずをそろえてお坊さんを待ちます。

図書箱に絵本を詰める

8:30 出勤

通勤はバイクで10分。ラオス事務所の朝はミーティングから。スタッフは日本人3人、ラオス人13人です。2月、図書館事業課は、北部シェンクワン県の小学校の先生に研修会を行い、終了後に130冊の本が入った図書箱を配りました。図書箱の中身は配布する小学校によって、低学年だけ、全学年、大人も読みに来る学校に分け、それぞれに違ったタイトルの本を入れていきます。90箱すべてにラオス語の絵本と日本から届いた絵本を詰めるのに1週間かかりました。

移動図書館活動

16:30 終業

ラオス人スタッフが家路につきます。バイクで奥さんや子どもを迎えに行ったり、ご主人がバイクで迎えに来たりします。夫婦と子ども2人が1台のバイクに乗る姿もよく見られます。そして夕食までの時間、家族や近所の人たちとゆったりとすごします。

大卒の初任給は月に18万キープ（約2100円）。ノート1冊は2000キープ、ラオス語の絵本は2万7000キープです。経済的に豊かな国ではありませんが、国民性は穏やかでのんびりしています。多くが親、兄弟、親戚など大家族で暮らしています。

スタッフと

19:00 夜

残業も限度。ラオスの建物は天井が高く、蛍光灯が暗いので、この時間になると書類がよく見えません（老眼のせい…）。仕事を切り上げてタ食の買い物へ。

昼間はただの住宅地ですが、夕方から夜9時過ぎまで、30～40軒のお惣菜の屋台が軒を連ねる、通称「おかず横丁」。汁物、炒め物、魚、肉、もち米、フランスパン、デザートなどラオス料理ならなんでもあります。

ビニール袋に入れて1品大体3000キープ（約35円）から。今日の夕食は、「カオジャーオ（もち米）」「クワパック（野菜炒め）」「ヒングムー（焼き豚）」「ナムワン（デザート）」。

ヴィエンチャンのシンボル、タートルアン

ヴィエンチャン市内

タートルアン広場での夕涼み

おかず横丁

文・写真：
高橋久夫（たかはし・ひさお）
宮城県生まれ。1998年SVAに入職。東京事務所広報課長などを経て、2006年からラオス事務所スタッフ。

Japan | 日本

上：重い箱は30Kg以上あります
中：トラックへの積み込み作業を終えて
下：今年もたくさんの方のご協力がありました

いってらっしゃい！ 2007年度の絵本が旅立ちました

1月31日午前11時30分、東京事務所から絵本を乗せたトラックが港に向けて出発。がらんとした倉庫を見て、すっと力が抜けました。

2007年は、アフガニスタンとミャンマー難民キャンプにも絵本を届けることが決まり、新しく33冊分の「訳文シール」を作る作業から1年が始まりました。現地から届いた訳文を、ボランティアさんが各ページに合うようにシールを採寸し図面化。より貼りやすく、読みやすくと心配りをしながらの作業でした。

絵本の注文は日に20～30件あり、いつも発送作業はてんてこ舞いです。ボランティアさんの手をお借りすることもしばしばありました。

訳文シールの貼られた絵本が戻ってくると、「絵本ドクター」のボランティアさんが1冊ずつ中身を点検し、貼り間違いは修正します。土曜日にもボランティアを募集したことで、中学生やお勤めされている方など幅広い層の方たちが、この活動に参加されるようになりました。後半は、山のように集まった絵本を前にして、2月の船便に間に合うのだろうかと心配しながらの作業でした。

また、「遠くにいてもできることを」と、千葉の「ハンカチの木」、長野の「おんなじ空ネットワーク」の皆さん、会員の小杉太一さん（静岡）も絵本の点検や修正、梱包に協力してくださいました。

絵本を翻訳する人。訳文シールを作る人。絵本を発送する人。シールを切り貼りする人。届いた絵本を修正する人。絵本を数え、箱に詰める人。トラックへ運ぶ人。船で運ぶ人……。かぞえきれないほどの人の手をつたって、2007年度は1万6641冊の絵本がアジアの子どもたちのもとへ旅立ちました。

届けられた絵本は子どもたちに何千回と読まれることでしょう。何人の手がページをめくり、何人の心に響くのでしょうか。幾重にもつながる無数の手に感謝をこめて。どうもありがとうございました。

（絵本を届ける運動担当　林飛鳥）

上：手紙の翻訳をする小山さん
下：発送準備をする立木さん

チャイルド・ブック・サポーター 子どもからの感謝状をお送りします

毎年4月、チャイルド・ブック・サポーターの皆さまに「子どもからの感謝状」をお送りしています。

12月、海外事務所のスタッフが子どもたちからの手紙を英訳し、写真と一緒に東京事務所に送ります。現在、その600枚あまりの手紙を日本語に翻訳し、カードに手紙と写真を貼り付け、発送する準備をボランティアの皆さんと進めています。

ボランティアのお二人に作業の感想をうかがうと、小山博美さんは「ミャンマー難民など日本では接点を持つことのない子どもたちの思いを知ることができました。素朴でまっすぐな考え方や表情からいろいろなことを感じます」。立木佑季さんは「子どもたちの写真と手紙を見ながら、おしゃべりしているような気がして楽しいです」と話してくださいました。

この手紙を受け取ったサポーターの皆さんからも、毎年たくさんの感想が届きます。子どもたちの顔を思い浮かべていただけると、スタッフとしてもうれしく思います。今年はどんな感想をいただけるか楽しみにしつつ、作業を進めています。

（チャイルド・ブック・サポーター担当　佐藤亘子）

シャンティな人たち

Shanti

No.42

佐野俊也

Syunya Sano

寒中の托鉢でカンボジアに学校を

北の大地に吹雪が吹き荒れるころ、毎年、寒中修行の托鉢にいそしんでいる僧侶がいる。北海道幌泉郡えりも町、法光寺（曹洞宗）住職の佐野俊也さん（54）である。集まった浄財と私財でカンボジアの学校建設の支援を続けている。

「夜空に浮かぶ満月を見ると思い起こすんです」。1997年、僧侶のスタディツアーで初めてカンボジアを訪問した時のこと。スバイリエン州の村では、日中の熱い陽射しを避け、夜間に、洪水で崩れた畦道を村人総出で補修していた。電気が通じず、満月の光が頼り。中には女性や子どももいた。「みんな楽しそうに力を合わせて作業しているんです。胸を打たれましたね。自他のために力を尽くす〈利行（りぎょう）〉の心を村人から教わりました」。

生命の重さについても考えさせられた。街を歩くと地雷で手足を失った子どもたちが物乞いをしている。「生命に値段はつけられないが、貧しさゆえに救われない生命がある。この国の人々と、私の生命の価値に差はないはずなのに…。この国のために何かしたい」。そう考えて学校建設の支援を決意。2002年にはダウンポート小学校を、2006年にはスヴァイ小学校を支援した。

贈呈式でスヴァイ村を訪ねたとき、道路事情が悪く、到着時間が大幅に遅れた。でも、村人が総出で待っていて、胸がいっぱいになった。

大学院では現代詩を学び、ジャズの愛好家でもある佐野さん。一昨年からチャリティ講演とコンサートも開催し、現在、3校目の小学校建設のため、資金集めに奔走中である。昨年のコンサートでは、広島で原爆投下の際、焼失を免れた「被爆ピアノ」をジャズピアニストの菅野邦彦氏が演奏し、好評を博した。「浄財をくださる人。吹雪の中、車を停めて『乗って行きませんか』、と声をかけてくれる人。托鉢していると、人のやさしさに触れてぐっとくる時があります。皆さんのこういうあたたかいお気持ちを届けたいんです」。来年の初め、3校目となるサー・イア小学校完成のあかつきには、5度目のカンボジア訪問を予定している。

（宗教法人担当　大菅俊幸）

クラフト・エイド 2008年のカタログができました

アジアの手工芸品を通して、それを作る女性たちと、使う人を結ぶクラフト・エイド。商品だけでなく、生産者団体の紹介や作り手の女性たちの声を通して、この活動の意味をお伝えしたいと思っています。

昨年は朝日新聞で紹介され大きな反響がありました。また商品開発に力をいれ現地の生産者を訪ねる一方で、国内でのワークショップを開いて生産者の紹介をするとりくみを始めました。フェア・トレードが日常の選択肢のひとつになるよう、さまざまな形でとりくんでいます。

会員の方には特典として10％の割引きがあります。記念品や引き出物のご注文、包装も承っています。数量が多い場合は早めにお問合せください。

カタログは無料でお送りします。ご希望の方はご連絡ください。

●クラフト・エイドのお問合せ
電話&FAX　03-3350-1981

（クラフト・エイド担当　神崎愛子）

会員とスタッフの活動をご紹介します　掲示板

建福寺で「がまの油」を披露する三遊亭遊之介さん

埼玉

チャリティ寄席で、笑って国際協力

1月26日、埼玉県羽生市の建福寺でチャリティ寄席が行われました。集まった90名の檀家さんは、三遊亭遊之介さんの落語と鏡味正二郎さんの太神楽を楽しまれ、募金活動に協力してくださいました。安野正樹住職は、次回、幼稚園の子ども向けにもチャリティ寄席を考えているそうです。

チャリティ寄席は、落語芸術協会の協力により、SVAの「国際ボランティアの寺」に登録している寺院を中心に開催しています。「ボランティアの心」と「笑い」、そして日本の文化を継承する機会として今年も各地で予定しています。

内藤英昭さん

長野

20年の思いをこめて カンボジアに学校を

長野県伊那市の長桂寺住職、内藤英昭さん（70）は、1986年からSVAの会員です。一昨年、会員継続20年を迎え永年会員として表彰されたことをきっかけに、カンボジアに学校を建てることを決意。今年2月、コンポントム州でいよいよ建設が始まりました。長桂寺婦人会としても、2005年から「絵本を届ける運動」に参加しており、今年も70冊の絵本に訳文を貼りました。内藤住職は、「学校が完成したら、一緒にカンボジアに行きましょう」と呼びかけ、婦人会のみなさんも学校ができるのを楽しみにしています。

受講生のみなさんと大菅スタッフ（前列中央）

東京

SVAスタッフが 曹洞宗総合研究センターで講師

昨年10月からスタッフの大菅俊幸は、曹洞宗総合研修センター教化研修部門で、週1回「教化活動法2（ボランティア論）」の講義を担当しています。SVAが実践してきた支援活動や仏教ボランティアの系譜についても触れ、社会活動を実践している仏教関係者も訪問しました。若い僧侶の方々にボランティアの活動への理解を深めていただければと願っています。

キユーピーグループが 書き損じハガキを寄付

キユーピーグループが、社会貢献活動の一環として、毎年社員に呼びかけ集めている書き損じハガキを、今年はSVAに寄付してくださいました。今年集まったのは2462枚。「書き損じハガキ100枚がカンボジアで出版する絵本15冊分」などわかりやすく呼びかけたことで、例年より8倍も多く集まったそうです。

昨年1年間にSVAにご寄付いただいた書き損じハガキ・切手、商品券、未使用のテレフォンカードは、約160万円分になりました。引き続き、書き損じハガキなどを収集し、活動資金や通信費として生かしていきたいと思います。

ケアホーム「瑞穂」のみなさん

滋賀

ケアホームのみなさんが アフガニスタンの教育支援

滋賀県大津市にある知的障がい者のケアホーム「瑞穂」では、1カ月に2回、ふだんの食事を粗食にし、余ったお金を貯めてアフガニスタンの支援募金を送ってくださいました。きっかけは、職員の1人の方がアフガンのSVAの活動を視察に行ったことでした。「弱い立場の人を大切にしよう」という気持ちを一緒にお預かりして、アフガンの子どもたちのために使わせていただきます。

シャンティ
2008年4月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻245号
1985年6月28日第三種郵便物認可

information & event

SVAからのお知らせ

バングラデシュ・サイクロン緊急救援

ＳＶＡは、昨年11月15日に発生したバングラデシュ・サイクロン（台風）被害に対する復興支援を、2008年1月より開始しました。主な内容は、被災地域で集会所とサイクロンシェルターの建設、子どもたちへの学用品の配布などです。事業は今年６月末まで継続する予定です。

バングラデシュ・サイクロン被害支援の募金を下記の口座で受け付けています。活動資金が不足していますので、どうぞご協力をお願いします。

郵便振替　00150−9−61724
加入者名　社団法人シャンティ国際ボランティア会

担当◎緊急救援担当　木村万里子・白鳥孝太

歳末募金にご協力ありがとうございました

2007年のＳＶＡ海外歳末募金には、3510名・団体の方から合計3191万6986円のご支援をいただきました。経済不況が長く叫ばれるなか、前年度よりも約320万円増え、多くの方々にご協力いただき心より感謝申し上げます。

東京事務所のインターン募集

ＳＶＡ東京事務所では、将来、国際協力の仕事に就きたいと考えている方のために、実務を通して知識と経験、能力を養うインターン制度があります。ＳＶＡの理念に賛同し、共に活動していただける方を募集します。インターン期間中は、参加者個人の目標に合わせて活動内容を設定し、事業の実施や会議への参加を通して、国際協力活動の基礎を身につけることができます。詳しくは当会ホームページをご覧ください。定員がありますので、ご了承ください。

なお、正規スタッフ、パートタイムスタッフの採用は、欠員があった場合にホームページに掲載しています。

担当◎経理・総務課

人事

<異動>
伊藤解子　企画調査室スタッフから海外事業課長補佐へ（1月1日付）
佐藤麻弥　国内事業課・絵本を届ける運動担当から国内事業課長補佐へ（1月1日付）
清野陽子　国内事業課・広報担当から国内事業課・絵本を届ける運動担当へ（1月1日付）

<退職>
若山聡　国内事業課スタッフ（12月31日付）

2007年度代議員会、SVAの日の集いを開催しました

2007年12月15日、東京のＵＩゼンセン同盟本部にて「2007年度通常代議員会」を開催いたしました。主な議題である「2008年度事業計画案・収支予算案」は、会員から選ばれた代議員の方々に審議いただき、承認されました。

また一部の代議員の方から、昨年10月に九州で開催された「代議員の集い」を今後も継続したいとの声があがり、2008年度も6月に東京での開催を予定しています。

代議員会終了後は、ＳＶＡの日の集いを開催し、日本経団連１％クラブコーディネーター長沢恵美子さんの講演会と会員継続20年を迎える永年会員の方31名の顕彰を行いました。

2008年3月29日に開催する「2008年度通常総会」では、2007年度の事業報告と決算の審議を行います。詳細は6月にお送りする年次報告書でお知らせいたします。

担当◎経理・総務課

2008年度スタディツアーのお知らせ

ＳＶＡが海外で行っている図書館活動を実際にご覧いただき、より深くご理解いただくためのスタディツアーを2008年も行います。今年は11月に、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプへのツアーを計画しています。難民キャンプを訪問する貴重な機会です。詳細は7月に発行する「シャンティ夏号」、またはホームページでもお知らせいたします。

担当◎チャイルド・ブック・サポーター担当　佐藤宣子

「絵本を届ける運動」参加費改定のお知らせ

この度、原油価格の高騰に伴い、絵本代、訳文シール印刷代、国内での送料などの値上がりを受け、5月1日より以下のように参加費の改定をさせていただくこととなりました。

2008年5月1日以降にお申し込みいただいた場合、

■ Aセット（絵本1冊+訳文シール）
2,000円（旧）→　2,200円（新）
■ Bセット（訳文シールのみ）
1,000円（旧）→　1,200円（新）

※50冊以上のお申し込みの際は1セットあたり200円の割引となります。

皆さまにご負担をおかけすることとなり、大変心苦しいのですが、ご理解とご支援のほど宜しくお願いいたします。

担当◎絵本を届ける運動担当　林飛鳥、清野陽子

スタッフのひとこと

［担当者の紹介］

■新潟県出身。大学卒業後、古民家再生に携ったあと、本好きが高じて図書館の世界へ。２００６年２月からＳＶＡスタッフに。山を恋しく思いつつ、初めての関東での生活を楽しんでいます。（チャイルド・ブック・サポーター担当　佐藤宣子）

■みなさんは毎日食べているものはありますか？私は納豆です。めかぶ、じゃこ、たくあん、柚子胡椒…思いつきで何でも入れます。いろんな味が楽しめます。絵本も人と出会い、すてきな物語が生まれます。「絵本」を担当して1年。まだ見ぬ味を探したいな。（絵本を届ける運動担当　林飛鳥）

■昨年からＳＶＡのスタッフになり、能登、中越沖、バングラデシュと、「災害」を通じてたくさんの出会いがありました。今後もそのご縁を大切に、みなさまの温かいお気持ちを支援活動という形に変えて、現地へ届けるかけ橋になれればと思っています。（緊急救援担当　木村万里子）

■**お詫び「シャンティ冬号」発送の遅れについて**　製作時に写真の位置がずれるという事態が発生し、その修正のため発送が1カ月遅れてしまいました。ご迷惑をおかけした皆さまに心よりお詫び申し上げます。今後はこのような不注意のないよう、進行管理と内容の充実に努めたいと思います。（村田泉）

ご意見・お問合せ・入会の申し込みは

社団法人・特定公益増進法人
シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL　03−5360−1233
FAX　03−5360−1220
WEB　http://www.sva.or.jp
E-Mail　info@sva.or.jp
郵便振替 00150−9−61724

「シャンティ」は、FSC森林認証紙（SGS-COC-1773）にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

発行所　社団法人シャンティ国際ボランティア会
発行人　若林恭英　／　編集人　茅野俊幸
装丁・デザイン　矢萩多聞　／　印刷　株式会社大川印刷

定価550円（税込）